

「静かな間はありませんか」と聞くと、「そんなら十丁ばかり松原の方へ行くと橋の傍にあります」
お内儀さんが言つた。

商人宿だつた。女中が一人居て、二階の八畳の間に通してくれた。何處かの中學校の先生が、
二月あま此處に下宿してゐたと女中が話した。

無想庵のところへ行つて見る。

僕は此處で、人間の理解は五官を超越しないと云はふと思ふ。

アヤマチは鬚毛の埃りから起る。

風が甚く吹かなければ、森のモズは木末に騒がない。

「あなたは十八の伊豫の人ですか」

障子をあけて前に毛を付いてゐる女の顔を見て僕は合點が行かなかつた。

「先生はおとゝひの晩不意に思ひ立つて奥さんと御一緒に大阪へ行かれました。二三日したらお
歸りになります」

「それぢや僕の小田原からの葉書見られたでせうか」と聞くと、一枚だけ御覽になりましたと、